

防災歳時記 (32)

—人柱が「地すべり」を防いだ—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

雪国の地すべり

地すべりは、地表の一部が緩い斜面に沿って、すべり落ちる現象である。山崩れ・がけ崩れ、土石流、地すべりは土砂災害の代表的なもので、実際にはこれらの災害が複合して発生することが多い。

地すべりは、全国どこでも起こるが、雪国の新潟・長野両県や能登半島などに多く発生する。雪解け水や長雨のあとの雨水が、徐々に地中にしみ込む。すると水を吸った地中の粘土層がすべり面となり、上部の堆積層が移動する。

地すべりは、人命を奪うばかりでなく、家々を壊し、農地や林地を荒廃させる。人の住んでいない山中で、地すべりが発生すると溪流に天然のダムをつくる。そのダムが決壊すると土石流を起こしたり、下流に洪水を発生させたりすることがある。

近年の地すべり災害といえば、1985(昭和60)年7月26日の長野市地附山の地すべりが記憶に新しい。老人ホーム4棟が倒壊し、逃げ遅れた入居者26人が死亡した。60年豪雪と梅雨の長雨のあとに発生した。



写真1 最深積雪の塔
(地上から天辺まで8.18m：板倉町柄山)

新潟県は全国有数の地すべり多発県で、融雪期の4月、梅雨期の7月ごろに最も多く発生する。県内では、上越・新井の両市及び中頸城郡が地すべりが多い。特に中頸城郡板倉町(旧寺野村)は、地すべり常襲地であり豪雪地でもある。同町では、1927(昭和2)年2月13日に非公認ながら日本の最深積雪818センチを記録した(写真1)。

新潟県では同町に「地すべり資料館」を設置し、地すべりの歴史、災害、防止工事など

の資料を展示してある。

人柱となった旅僧

「人柱」とは、昔、城、橋、堤防などの工事をするとき、神の心を和げるために、いけにえとして生きた人を水底または地中に埋めることをいう。また、あることのため犠牲となって死んだ人をいう(小学館二日本国語大辞典)。

板倉町文化財保護委員会によると、同町猿供養寺集落には、昔から次のような話が伝えられている。

今から 800 年前(鎌倉時代)、同町の丈六山の中腹から大熊川に向かって大地すべりが起きた。田畑、山林はもとより先祖代々築き上げた宅地住宅に至るまで次々と崩れ、家は傾き壁は落ちる惨状を呈した。住民はその対策に頭を悩ませていた。

そのとき、一人の旅僧が北信濃から黒倉峠を越えて、村にやってきた。旅僧は、集落の荒れ果てた惨状を目の当たりに見せつけられて、ただただ驚くばかりであった。

人柱を埋めれば地すべりは止まる。しかし、村人の中には人柱のなり手がいない。

村人は旅僧の衣にすがり、救って欲しいと訴えた。

そこで、旅僧は考えをめぐらした。

「衆生済度(人々を救って悟りを得させること:広辞苑))は自分の本心である。何とかして集落の人々を救ってやりたい」と一大決心して自ら、生きて土中に埋まることを申し出たのであった。

世の中には、橋の流失防止のために人柱となった例はあるが、地すべり防止の人柱



写真2 すべりどめ人柱供養堂

は全国まれだそうだ。この美挙は、集落の語り草として古老から子孫へ伝えられた。

人柱の埋められた場所が長い間わからなかったが、1937(昭和12)年3月16日、村人細井誓示氏が客土を行った際に発掘した。その場所は、村を見渡せる景勝の地で、周辺に桐や桑が植えてあった。

土の中から、かめ(甕)をすっぽりかぶった座禅姿の人骨が掘り出された。身体各部分ははっきりしており、50歳ぐらいの男子で特に脚の部分の骨が大きく、鍛えられた修業僧であった。鎌倉時代製作のかめの周辺には宋銭が供えてあった。

町では、1972(昭和42)年文化財として指定し、新潟大学医学部に依頼して、遺骨の風化防止と永久保存の対策を講じた。

集落では、この尊い旅僧の霊を慰めるため、発掘の地にお堂を建て、毎年丁重な供養を行って今日に及んでいる(写真2)。

地すべりは人々を泣かせる。この伝説は、地すべりという恐ろしい自然現象に向かって何代も戦い続けている人間の苦しみを語っている。